

蓮如上人和歌集

稻 葉 昌 丸

蓮如上人の歌集として傳へらるゝものは無いではないが、その正確なるものといふと、大正十一年に禿氏祐祥氏が其著『蓮如上人御文全集』に附載せられた和歌集が、恐らく吾等の見る最初のものであらう。この和歌集は主として御文全集にあるものを一纏めとし、其他蓮師の眞筆のものや『遺徳記』や『行狀記』によりて増補せられたもので、歌の總數百三十首を收めてある。翌大正十二年に橋川正氏は『蓮如上人の和歌』と題する小冊を公にせられた。是は同氏が粟津文庫中に實如上人の編集にかゝる歌集の傳寫本を發見せられたのに起因するので、同上人編集の分百二十二首を以て主體とし、拾遺としては、禿氏師の集を以て之を補ひ、又自身發見のものをも加へて、通計百八十三首となりてある。但し實如上人集録中五七は一一〇と重複し、拾遺中の一八二、一八三は本集の六七、九四と重複するから、實際は百八十首であるが、是までの最大集録といふべきである。然るに一昨年春予は『行實』編纂の所用によりて古橋願得寺を訪ふたるとき、寺主清澤勝兼師は故紙中より發見したりきて、一種の蓮如上人和歌集を示された。是れ實に實悟尊老の眞筆に成るもので、同年の夏大阪に於て大谷大學講座の開かれたるとき展觀

に供せられたものである。爾來予は此記録を委く研究する機會を待ち居りしが、本夏漸くその望を達し得た。發見の當時は離れゝに成りありし紙片を兎も角も連綴して、今は一軸の卷物となりてある。左様の譯で紙片の前後が錯雜して、確ミ原形を認め難く、且元來實悟尊老が新に歌を見聞するまゝに記録せられた未定稿であるから、同じ歌で重出し又三重出して居るのが尠くない。然し大體の構成は先づ年月の明なるものを年代順に排列し、年月の知れざる分を後に一括する方針なりし事は明了に知らるゝ。左の識語がある。

右蓮——上人御詠歌於所々御作共不

及撰出書寫也如此雖書集近來

錯亂悉失畢仍此一兩年漸寫

聚者也

天正八年霜月日 八十九歲兼俊 花押

同御詠あらば聞付次第書そへべき也

此集に收むる歌二百七十首計りであるが、予は重複を整理して二百十一首を得た。是に橋川氏の本及其他によりて漏れたるを補ひ、之を實悟師編集の方針に従つて年月順に排列し、年月不明の分は後に一括して、通計二百七十五首となりた(内二首は基綱卿及如宗禪尼の返歌なり)。是は恐らく現在に於ける最大集録と見てよからうが、此外になほ漏れたのが有るべしと多分に信ぜらるゝから、大方識者の御注意によりて之を補はんこの念願で、兎も角も此

誌上で發表する事にした。傳來の確實なる歌で此集になきものを發見の方々は編者まで御通知下されば幸甚である。その用の爲に索引を作りました。

序に附言する。禿氏師は『蓮如尊師行狀記』より七首を編入せられたが、予は行狀記よりは寧ろ先啓の『蓮如上人緣起』によりて十一首を採用した。其理由は、行狀記なるものは、予の觀る所では、堅田本福寺の先代が『蓮如上人御一代記』と題する書を底本として之に寺に傳來する舊記によりて訂正を施したものである。然るに此御一代記は遽に信用し難き書で、行狀記に於て訂正の施された前半の部分蓮師吉崎御下向までの處は宜しきが、其後の部分は甚だ杜撰で、眞偽相半すといふべきである。所で吉崎に於ける御歌四首、吉崎退去の時の御歌二首はみな御一代記に載する所である。之に比較するに、先啓の緣起は餘程正確を期して編纂せられてあるから、予は之によりて、河内久寶寺に於ける歌二首、二俣にての歌二首、栃河にての歌一首、吉崎にての歌四首、出口にての一首、大津にての一首、すべて十一首を編入した。然し越後鳥屋野にての歌一首、吉崎退去のときの歌二首は流石に割愛し兼ねて、行狀記によりて採用した。すべて此等の歌は實如上人及實悟師の集録になきもので、多くは傳來の明ならぬものと思はるゝが、識者の示教を得ば幸である。因みに、此集中正本と附記したるは實悟師の記入によりたるもので、眞本を實見せられたものと思ふ。

集全文御(字數洋)
本如實(字數漢)
ハルタシ附ナ()
加道川橋
本悟實(印〇)

蓮如上人和歌集

- 1、(三)、一 寶徳元年越後の鳥屋野にて(行狀記)
- 3、八、四 〇 應仁二年四月御文に
- 2、六、三 〇 同年四月廿二日御夢の記に
- 4、一、 〇 同年十二月仲旬吉野紀行の内に(實如本)
- 5、二、 〇 高野山より十津河の道にて三首
- 6、三、 〇 十津河より小田井の道にて二首
- 7、四、 〇 十津河より小田井の道にて二首
- 8、五、 〇 下淵より河づらの道にて
- 9、六、 〇 河づらより吉野藏王堂一見のとき
- 10、七、 〇 河づらより吉野藏王堂一見のとき
- 一、一、 〇 文明元年の御歌歟(實悟本)

蓮如上人和歌集

- | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|--------|--------|---------|---------|--------|---------|---------|-------|
| 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 五十五の | いにしへの | 三吉野の | 山々の | 谷々の | これほきに | 十津河の | 奥吉野 | かきこむる | かきをきし | 師の跡を |
| ミしをむかへて | 心うかりし | 河つらつぐ | さかしき道を | さかりの紅葉 | けはしき山の | 鬼すむ山ミ | きびしき山の | ふでのあきこそ | 文のこきばに | 遠く尋て |
| この國の | 三吉野の | いゝがひの | すぎゆけば | 三吉野の | 道すから | きゝしかき | そわづたひ | あはれなれ | のこりけり | 來て見れば |
| 法にあひぬる | けふは紅葉も | いもせの山は | 河にぞつれて | 吉野の山の | のりのゆかりに | すぎにし人の | 十津河をつる | のながせの水 | むかしがたりは | 涙にそむる |
| 縁ぞうれしき | さかりミぞみる | ちかくこそみれ | かへる下淵 | 秋ぞものうき | あらでやはゆく | あきゝおもへば | のながせの水 | 昨日今日にて | 昨日今日にて | 紫の竹 |

一、一、
○ 文明二歲庚寅二月廿日
御判(實悟本)
正本二首

一、六、
○ 同年二月廿八日御判
光闡坊に在之(實悟本)
正本二首

11、(二四)、
○ 同年二月廿八日御判
光闡坊に在之(實悟本)
正本二首

12、(三五)、
○ 文明三年春河内國久寶
寺にて(緣起)二首

一、一、
一、一、
一、一、
○ 文明三年七月十六日加
州二侯にて御文に

14、
○ 文明三年七月十六日加
州二侯にて御文に

15、
○ 同年七月十八日二侯に
て御文に

16、(二七)、
一 文明四年二月御文に

17、(二六)、
○ 同年亡母の十三回忌に
あたりて(御文)三首

18、(二九)、
○

19、(三〇)、
○

20、
○ 文明五年霜月廿一日御
文に三首

12 五十六は 定命なるに 我身なほ 眞證の證や ちかくなるらむ

13 みな人の 我をこらぬ 信ぞかし たのむころも 他力なりけり

14 きけや人 むかしのゑんの あればたゞ おのれに信は おこるなりけり

15 極樂へ われにゆかんミ はからふは 彌陀のちからは たのまざるなり

16 くる春も おなじこすへを 詠れば 色もかはらぬ やぶかきの梅

17 年つもり 五十有餘を おくるまで きくにかはらぬ 鐘や久寶寺

18 つくくミ おもひくらし 入あひの かねのひききに 彌陀ぞこひしき

19 あつき日に ながるゝあせは なみだかな かきをくふでの あまぞおかしき

20 一念の うちにさだまる 往生を こなへてのちこ おもふはかなさ

21 トミトセ 十三年を おくる月日は いつのまに 今日めぐりあふ 身ぞあはれなる

22 おほつかな まことのころ よもあらじ いかなるころの 住家なるらん

23 いまははや 五障の雲も はれぬらん 極樂淨土は ちかきかのきし

24 五十路に あまる年まで ながらへて この霜月に あふぞうれしき

此歌は後醍醐天皇御子八歳の宮御歌なるをそれは君ぞこひしきとあり、こ
れは彌陀ぞ戀しきとかけられ侍れば可爲御詠也 (實悟)

21、六、〇	三年まで	命のながきも	霜月の	のりにあひぬる	身こそたふさぎ
22、七、〇	のちの年	又霜月に	あはれこゝ	いのちもしらぬ	我身なりけり
102、三、〇	たゞたのめ	彌陀のちかひの	ふかければ	いつゝのつみは	ほこけこそなる
23、三、〇	のちの代の	しるしのために	かきぎし	のりのここの葉	かたみこもなれ
24、三、〇	秋さりて	夏もすぎぬる	冬ざれの	いまは春べこ	こゝろのぎけし
一、(八二)、一	もうゝの	雑行すてゝ	みな人の	彌陀をたのまゝば	佛にぞなる
58、七、〇	なきあこに	我をわすれぬ	人もあらば	猶彌陀たのむ	心おこせよ
一、七、〇	なきあこに	我を尋ぬる	人もあらば	彌陀の淨土へ	あるまじくたへよ
25、(三三)、〇	立置し	庭の石木も	かはるなよ	又ふたまたの	春にあふべし
26、(二三)、一	豊吉な	ながれもきよき	二俣の	光はなをも	すめる水かな
一、一、一	おつる齒も	出入る息の	たびこに	南無阿彌陀佛の	聲ぞそみつゝ
一、一、一	ほこゝミ	たゝく船ばた	吉崎の	浪の上にも	彌陀たのむかな
28、(三三)、一	はまさかの	山のあなたに	うつ波も	夢おごろかす	のりの音かな
29、(二三)、一	鹿島山	こまり鳥の	こゑきけば	今日は暮ぬこ	つけわたるなり
30、(二三)、一	草木さへ	拂ひはてたる	濱坂の	嵐の音は	南無阿彌陀佛

40、〇 同年極月廿九日御文に
三首

41、三、〇

42、三、〇

43、(一四)、〇 文明十年極月晦日山科
にて(御文)二首

44、(一四)、〇

46、(一四)、〇 文明十一年正月に(御
文)

45、(一四)、〇 同年九月十二日夜月を
みて(御文)

一、七、〇 右改めて

47、(一四)、〇 文明十三年十一月廿四
日御文に

48、(一四)、一 文明十五年八月攝津の
有馬に遊びて八首(全
集)

49、(一四)、一

50、(一四)、一

51、(一四)、一

52、(一五)、一

53、(一五)、一

53 六十あまり

おくりし年の つもりにや

彌陀の御法に あふぞうれしき

54 あけくれは

信心ひこつに なくさみて

ほみけの恩を ふかくおもへば

55 いままで

おくる月日の たちゆけば

また いく春やへし 冬のゆづれ

56 ふる年も

くるゝ月日の 今日までも

なにかは祖師の 恩ならぬ身や

57 六十あまり

おくりむかふる 命こそ

春にやあはん 老の夕暮

58 祖父の年

おなじよはひの 命こそ

なからふる身ぞ うれしかりける

59 小野山や

ふもこは山科 西中野村

ひかりたゞしき 庭の月影

60 小野山や

おはやけつゝく 山科の

ひかりくまなき にはの月影

61 このこき葉

かきをく筆の 跡を見て

法のこゝろの ありもこそせよ

62 音にきく

ます田の池を いまみれば

つゞみのかたち それこのみしる

63 岩坂や

七坂八峠 こえずぎて

有馬の山の 湯にぞつきけり

64 さかこえて

縁有馬の 湯舟には

けふぞはじめて 入ぞうれしき

65 ふるさくに

にたるこおもふ 湯の山の

をこかしましき やぎの谷川

66 年を経て

又ゆの山に 入る身こそ

薬師如來の えにしふかけれ

67 老の身の

命いまだ 有馬山

又湯にいらん ここもかたしや

54、(一五二)、一	68	ゆの山を	いつかけしきを	道すがら	かまくら谷の	をもしろきかな
55、(一五二)、一	69	日數へて	湯にやしろしの	有馬山	やまいもなをり	かへる旅人
一、一、	70	つの國に	いまだたえせぬ	有馬山	わく湯のかずは	神の誓ぞ
一、一、	71	七十に	みてる年まで	老の身の	いつをかぎりの	世にはすまゝし
56、(一五四)、一	72	七十に	はやみつしほの	すえの松	老の年なみ	又やこえなむ
一、一、	73	七十に	つもる年まで	いける身の	かりのやぎりを	いつかいでなん
57、三、	74	七十路に	身はみつしほの	にしの海	ふなぢをてらせ	山のはの月
一、一、	75	ながむれば	くもるこもなき	秋の夜の	月のひかりに	わたる鴈がね
一、一、	76	ふる年を	こへぬるうへに	今日は又	猶一春を	かさねてやへん
60、(一五六)、〇	77	あか月の	ねさめの枕	おごろきて	なくほこぎす	かすくのこゑ
59、(一五五)、一	78	七十地に	年はひこつも	あまれごも	いつをかぎりの	世にはすままし
一、三、	79	七十地に	年はひこつも	あまれごも	むかへぞおそき	彼岸のふね
一、五、	80	かぞふれば	つもる月日の	やこしまで	すみぞなれぬる	やましなのさこ
一、三、	81	七十地に	あまるぞ老の	こしをへて	またこの春の	はなやみてまし
一、一、	82	西へのく	月こつればや	老の身の	七十地すぎて	こしのつもれば

七十有餘のおりの御歌
(實悟本)五首

一、一、	〇	83	老の身の	七十地あまり	けふすぎて	雪ふりつもる	ごしのゆふぐれ
一、一、	〇	84	我身はや	七十にあまる	よはひにて	冬の日數も	つもる夕暮
一、一、	〇	85	七十に	あまる我身の	つれなさよ	はや此冬も	くるゝ年月
一、毛、	同(實如本)	86	七十地に	年はあまりて	けふもはや	一夜ばかりの	老のゆふぐれ
一、一、	〇 同(實悟本)二首	87	かぎりなく	七十あまり	年たけて	ながらふ身こそ	つれなかりけれ
一、一、	〇	88	いつまで	七十あまり	老らくの	いける命の	つれなさの身や
61、(五七)、〇	文明十八年三月八日出 口より堺の濱へ出て紀 伊に遊びて(實悟本) 正本 七首	89	いつみなる	したての池を	みるからに	心すみぬる	かい寺の宮
62、(五八)、〇		90	河なべの	瀬々の浪もや	水たかく	をくながれて	ながをなりけり
63、(五九)、〇		91	音にきく	清水ノ浦に	舟にのり	岩間がくれに	見ゆる嶋々
64、(六〇)、〇		92	藤白の	嶋 ^山 や小島を	ながむれば	たゞ布引の	しろきはま松
65、(六一)、〇		93	此嶋に	名残をおし	又かへり	月もろこもに	あかす春の夜 ^{よすがら}
66、(六二)、〇		94	わきいづる	清水ノ浦を	けさははや	ながめてかへる	跡の戀しさ
67、(六三)、〇		95	いづみなる	ふけるノ浦の	浪風 ^浪 に	舟こぎいづる	旅のあさだち
一、一、	延徳二年正月十五日朝 いるりのまにて(實悟 本)	96	此春は	みつはくむまじ	年つもる	七十あまり	身こそ老ぬれ
一、一、	〇 同年十二月堺にて(實 悟本)七首	97	七十に	あまるよはひの	さかひにて	年やこえなん	はじめ成けり

112	つのに	さかひよりみる	住吉の	神のめぐみに	あふぞうれしき
111	七十に	こしはあまりて	この春の	花をあひみん	えにしふかさよ
110	けふははや	あくる雲井の	天つ空	かへるこつぐる	鴈の一聲
109	けふははや	日もつすがすむ	空なれば	たれも心は	のこけからまし
108	けふよりは	雪ふりそむる	山の井の	うすがすみてや	見ゆる夕ぐれ
107	いでそむる	空ぞほのかに	三日の月	けふはじめてや	春こしらるゝ
106	老らくの	こしをかさぬる	春くれば	花にあふべき	心こそすれ
105	春くれば	難波のこども	いふなみの	海こしみゆる	船の行すゑ
104	つのに	むかしながらも	けふははや	春こいふべき	空のよそほひ
103	つれなくも	七十七	いける身の	往來もつもの	あこはしられじ
102	わきいづる	和泉のさかひ	しほふろに	くだりていりし	えにしふかさよ
101	えにしあれば	又やくだりて	境なる	入しほふろに	年こそこれ
100	七十七	よはひはなやぎ	老の身の	春やむかへん	さかひなるかな
99	八專も	寒も土用も	波風に	みなふきうする	堺なりけり
98	七十に	七のこしの	はじめかな	春めづらしき	さかひなるらん

延徳三年辛亥正月愚詠
(實悟本) 正本 九首

一、三、	○ 同年の歌(實悟本)二首	113	七十地に	あまる我身も 七年を	なきてぞつぐる 郭公かな
一、一、	○ 延徳四年五月近松より 厚木の花五ツさき實の 成たるを持参ありしに (空善記)	114	いつまでか	七十地七つ 年たけて	今日にしらるゝ 秋の七夕
68、(二四)、○	○ 法印號の兩脇に(實悟 本) 正本 二首	115	厚 ^{ホウ} の木に	實こそなりぬれ 世の中に	ひろまるものは 彌陀の本願
一、一、	○ 同年の歌(實悟本)	116	いまははや	八十地にちかき 老の身の	いつをかぎりの 世にはすむらむ
一、三、	○ 年暮ぬればはや満八十 になるべき事な(實悟 本) 正本 二首	117	後の世に	我名をおもひ 出 ^シ しなば のそてい	ふかくたつめよ 彌陀のちかひを
一、四、	○ 同年の歌(實悟本)	118	いつまでこ	なみだ露 ^シ けき すみぞめの	八十地にちかき あきのほしあひ
一、一、	○ 又歌(實悟本)	119	佛にも	祖師にもよはひ おななくて	八十地にみてる あくる初春
98、ち、	○ 又歌(實悟本)	120	我なくば	誰も心を ひみつにて	南無阿彌陀佛ミ たのめみなひこ
69、一、	○ 又歌(實悟本)二首 正本	121	佛にも	祖師にもよはひ おななくて	いける八十地の かすぞたふこき いのちながらふ
一、五、	○ 又歌(實悟本)二首 正本	122	佛にも	祖師にもよはひ おななくて	八十地にみてる 身さへたふこし
101、七、	○ 又歌(全集)二首	123	極樂に ^{ヘイ}	我ゆくなりミ きくならは	いそぎて彌陀を たのめみな人
70、五、	○ 又歌(全集)二首	124	ミしのかす	ねがひし身にも なりにけり	やそちにみてる あくるはつはる 老のゆくすゑ
71、空、	○ 又歌(全集)二首	125	この葉ちる	にはの山路を めぐるにも	わが身になたる 花のあはれさ
一、四、	○ 同年の歌(實如本)	126	をいらくの	この歌山科南殿の庭にてあそばす駿河入道善宗憶物語也 (實悟)	春秋やくる しはせ月 やそちにみてる 冬くれにけり

一、四八、 ○ 又(實悟本)二首

127 しはせ月

日數つもりし 老の身は

八十地にゐてる冬の暮かな

一、一、 ○ 正本

128 いく春の

秋の月をも おくる身の

八十地につもる老のゆふ暮

一、一、 ○ 明應三年滿八十歳法印號の前記に 正本(實悟本)二首

129 八十路まで

命ながらふ 老の身の

月の船路を まつや彼岸

一、一、 ○

130 我なしに

きかばやがても みな人は

南無阿彌陀佛こ たれもたのめよ

一、四三、 一 同年の歌(實如本)二首

131 八十地まで

つもりしにの しるしには

南無阿彌陀佛こ いふほかはなし

一、四四、 一

132 明應三

八月八日の 八の字ミ

八十地のよはい おなじかりけり

一、一、 ○ 同年十一月廿二日姉小路基綱卿の返歌(實悟本)正本

133 八十地まで

老を知ざる 君なれば

猶行末や 千世の春秋

75 (一六七)、一 明應四年予八十一歳なり又此冬暮は八十二歳なり仍如此詠歌云(全集)三首

134 春立て

又や年へむ 老樂の

花にはえにし 我身ならむ

76 三、 ○

135 つれなやな

今年の冬も 是や暮て

八十地にいまは ふたつあまれり

77 七、 一

136 彌陀たのむ

心ひこつた たふごさに

いつもうれしき 涙なるかな

75 (一六五)、一 同年極月日八十一歳御判(橋川本)正本 七首

137 春夏は

日ながけれぎ 一つの間に

秋冬くらす ほごのちかさよ

一、(一七三)、一

138 なにきてか

冬の日數の たちたるに

風あたゝかなりし 庭の明かな

一、(一七六)、一

139 老の身の

むかしがたりを おもふにも

たゞ何事も 夢の世のなか

一、(一七八)、一

140 年は暮

八十に(餘カ)る 老樂の

いつをかぎりの 世にはすまゝし

一、(一七八)、一

141 彌陀たのむ

我身の心の たふごさに

いつもなみだに ぬる、袖かな

- 一、(七七)、一
74、(六六)、一
78、(六六)、一
79、(六九)、一
96、(七三)、〇
一、一、〇
一、五、〇
一、一、〇
一、五、〇
81、九、〇
一、三、〇
99、二、〇
一、二八、〇
一、三、〇
- 明應五年八月七日御文
に二首
同年八月廿五日に芳野
飯貝坊に御下りありて
(實悟本)正本 二首
明應五歳末の歌(實悟
本)三首
明應六年五月十八日六
字の尊號のおくに八十
三歳御判(實悟本)正本
四首

- 142 八十あまり 彌陀をたのみしたふごさに ころもの袖は 涙なりけり
143 年くれて 老の命も もろごもに さゆる月夜ご にしにゆかはや
144 ふしぎなる 彌陀のちかひにあふもなを むかしののりの もよほしぞかし
145 いくたびか さだめしここの かはるらん たのむまじきは ころなりけり
146 吉野川 ころぞのころ 河づらの すみてもみばや ころにいひがる
147 名もしろし 浪音たかき 吉野川 ちまたの里は むかひにぞみる
148 年たけて 八十地に三は あまる身の いつをかぎりの 世にはすままし
149 年くれて 老のよはひを かぞふれば 八十にみこせ あまるつれなさ
150 八十地には 三ごせはあまる けふまじも いつをかぎりご 命つれなさ
151 南無さいふ 二字のうちには 彌陀をたのみ ナシイ たれもしるべし
152 みなひごの ひしごたのむご いふならば 彌陀はしりてや すくひたまはむ
153 眞實の 信心ならでは のちの世の たからごおもふ 物はあらじな
154 彌陀たのみ ころろひごのつ たふごさに なみだもよはす 墨染の袖
155 南無さいふ 二字の内には をのづから 人々をたすくる ちかひなりけり
156 阿彌陀佛ご まふす御名こそたふごけれ

一、三、 ○

一念に

彌陀をふかくイ 信すれば

やすく淨土へ

むまるこはしれ

一、四、 ○

發願の

廻向にいへる そのころ

衆生攝取の

すがたなりけり

83、(一七)〇 同年十月十四日御文に
二首

159 あつらへし

文のこの葉 をそくこも

けふまで命

あるをたのめよ

82、(一七)〇

160 八十地あまりをくる月日は

けふまでも

いのちながらふ

身さへつれなやりぬるかなイ

一、五、 ○ 同年十一月仲旬御文に

161 春秋を

なににすぎにし こしかな

こしは八十地にあまるつれなさ

あまるさかひに年をさかぬにイ

一、四、 ○ 八十有餘の御歌(實如
本)四首

162 西へゆく

月こつればや 老らくの

八十地にこしは

あまるさかひに

一、三、 ○

163 年月の

つもりしこしは しらねごも

八十地にあまる

老樂の身や

一、四、

164 このころはつれなくもイ

やさぢにあまる をいの身の

いつをかぎりこ

世にはすままし

一、四、

165 八十地あまりをくりむかふる

老の身の

いつをかぎりの

世にはすままし

一、一、 ○ 又(實悟本)正本八首

166 八十地あまりをくりし年の

春秋を

昨日けふこや

おもひぬるかな

一、一、 ○

167 八十地あまりこしもつれなくいける身の

いつをかぎりこ

いつをかぎりこ

まつぞひさしきささだめぬ

一、一、 ○

168 こしつもり

八十地にあまるをひらくの

あすこもわかぬ

ゆふ月のそら

一、一、 ○

169 八十地あまり春秋をくる

月日こそ

けふにしらるゝ

年も暮けり

一、三、 ○

170 あはれなり

くれゆく年の 日かすかな

老のつもりは

八十地あまれば

一、一、 ○

171 このころは

八十地にあまる冬くれて

春をもまたぬ

老らくの身や

八十地あまりの 初春のそら

花にさきだつ
身ぞあはれなる

なごかねがはんい
たぐねがはしき
報土往生

たぐねがはしき
西の彼岸

南無阿彌陀佛たのめみなひこ

筆をつくして
かきぞをきぬる

罪はほごけに
まかすべきなり

彌陀にまされる　ほごけあらじな

願行具足の南無阿彌陀佛なり

たぐねがはしき
西のかのきし

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

ひさしくいきしこしれやみな人

明應八年 往生こそすれ

雜行すて、
彌陀をたのめ

一一七

御詠歌月日知らざる分

一、一、 ○ (實悟本)八首

186 あらたまの

年のはじめを 祝ごも

南無阿彌陀佛の を思ひ こころわするな

一、三、 ○

187 うれしやな

たふこやこそ いはれけれ るい

南無阿彌陀佛の こゑい 口のひまには

一、七、 ○ 正本

188 彌陀たのむ

我身ひさりの たふごさに

なみだもよほす をいの ぬるゝ袖かな

一、一、 ○ 正本

189 彌陀たのむ

人の心の たふごさに

なみだをのごふ 墨染の袖

一、三、 ○

190 彌陀たのむ

わが身ばかりは 佛にて

人のこころは いかゞあるらん

一、九、 ○

191 彌陀たのむ

人はねざめの のい 郭公

我名ごなふる あけほののそら

一、二、 ○

192 彌陀たのむ

人はつりする 舟なれや

つみをつめごも しづまざりけり

一、一、 ○

193 彌陀をたゞ

こころひごつに たのみなほ

浄土の往生 うたがひはなし

一、六、 (實如本)二首

194 彌陀をたゞ

たのむこころの あるならば

浄土往生 うたがひはなし

一、二、

195 彌陀をたゞ

たのむこころの はじめより

我とおこらぬ こころごぞしれ

一、一、 ○ (實悟本)正本十七首

196 みな人の

彌陀をたのむこ いふならば

月の夜ふねの のりてわたらむ

一、三、 ○

197 みな人の

みだの誓を たのみなほ

西の浄土へ まいるこはしれ

一、三、 ○

198 みな人の

まごの信は さらになし

ものしりがほの ふぜいばかりぞ

一、一、 ○ 正本

199 みな人は

彌陀をたのめよ 後の世は のい

まいらむかたは 浄土なるべし

一、
○ 正本

○正本

○ 〵

一、九八、〇

○

一、九七、〇

0.

一、〇 正本

一五六〇

○

O 15

一、查

一三〇

一、三、一（實如本）二首

一六

200
みな人は
彌陀をたのまん後の世は

201
みな人は
彌陀をたのまん後の世は

202
一念に
はや往生の
ひまをえて

一念に
むまれゆくべき
極樂も

204
たかき山
ふかきうみにも
限りあり

法のみち
たふさきこは
つきせねは

206 極樂は
我人まいる
浄土なれば

207
つみふかき
人をたすくる
法なれば

208 かゝる身を たすけたまへご 思ひき

209
きのふまで
けふまでつくる 罪ごかも
(ち脱カ)

つみふかき
身こむまれぬこそうれしけれ
(ち魔カ)

211
つみの身を
たすけたまへる
彌陀なれは
ふしぎイ

不思議ごも
いふばかりなき
ちかひかな

213
なぐるこし
めぐる月日の
今日までも

214 たのめこの
をしへののりに ひかれ

月の舟路の
ちかき彼岸

弘誓の舟に
のらんごぞきけ

うれしき事に
ひまもなの身や

おもひしらねば
うれしさもなし

彌陀の功徳を
なにとせん

いそぎむかへよ
彌陀の報土へ

つるにやあはん　　ひごつごころへ

たゞ一すぢに
彌陀をたのめよ

わが往生は
さだまろごしれ

彌陀をたのめば
たすけます

さてこそたのため
彌陀のちかひを

噫よりほかの
ここのはもなし

不思議不可思議 言語道斷

いづれか祖師の恩ならぬ身や

彌陀たのむ身となれるうれしさ

一、一、	〇	たのませて	たのまれたまふ・彌陀なれば	わがはからひの	いらぬ成けり
一、一、	〇	うまれつく	ころの罪の	そのまゝに	あらためたきは
一、一、	〇	たれこても	六字のころ	知ならば	たのむ一念
一、一、	〇	名號は	如來の御名ミ	思しに	つみの衆生も
一、一、	〇	阿彌陀佛ミ	なりしほミけの	すがたこそ	我往生の
95、(一七)、	〇	たぐひなき	佛智の一念	うるこそは	彌陀のひかりの
一、一、	〇	いつるいき	いるをもまたぬ	この世なれば	いそぎてたのめ
一、一、	〇	あすもこは	なにしたのむらん	老らくの	けふのゆふべも
一、一、	〇	いつまでか	有爲の命 <small>老イ 梁婆にはイ</small> の	ながらへて	無爲の淨土は <small>のイ</small>
一、一、	〇	みがけたゞ	心のこもを	たづねれば	よきもあしきも
一、一、	〇	法の師の	筆ミ心を	つくせごも	まことのみちを
一、一、	〇	かきやし <small>き(脱カ)</small>	念佛の功の	つもりなば	にしの淨土は
一、一、	〇	かきをきし	ふでの跡こそ	あはれなれ	昔をおもふ
一、一、	〇	このころは	經や本書を	人まねに <small>きイ</small>	いかなる人も
一、一、	〇	世の中の	をくれさきたつ	定めなさ <small>きイ</small>	いまぞしりぬる
					身こそつれなき <small>たイ</small>

133	〇	いつまでか	わが身ながらも	つれなくて	命ながらふ	いまの世の中
131	〇	あすはけに	我たらちをの	日なりけり	昔をおもふ	なみだふかさよ
130	〇	老の身 ^{がイ}	のちまじたのむ ^{みし}	たらちめの	のこりて跡に	あるもかなしき
129	〇	みな人の	壽像々々	いひけれき	後にはつねに	なげしにぞすむ
128	—	壽像	いのちのかたち	かきたれば	いきたるうちに	我をみよし
127	〇	露の身の	命	きえはて	その名ばかりや	跡にのこらん
126	—	あはれなり	老のやまひの	くるしみは	前世のむくひ	むなしからねば
125	—	後の世に	われをたづぬる	人もあらば ^{ナシイ}	彌陀の淨土に	あるこゝたへよ
124	〇	かたみには	六字の御名を	ぎめをく	わがのちの ^イ	これな ^イ
123	〇	われなくば	誰も心を	ひこつにて	彌陀をたのまん	身もなれかし
122	—	われなくば	誰もこころを	ひこむきに	彌陀をたのみて	後生たすかれ
121	—	われなくミ	たれもこころを	ひこむきに	いそきて彌陀を	たのめみな人
120	〇	我死せば	あはれおもふ	人あらば	彌陀をたのみて	後生たすかれ
119	〇	われなくて	のちに哀 ^イ	おもひなは	彌陀をたのみて	後生たすかれ
118	〇	なきあゝに	われを戀 ^イ	おもひなは	彌陀をたのみし	こころもつべし

一、一、	○	245	なきあまに	われを戀しく	おもひなば	彌陀のちかひを	たのめみな人
一、二、	○ 正本	246	みな人の	法のみちをば	こはすこも	せめては馬の	物がたりせよ
一、二、	○ 下間藏人自在を進上し して後往生せし時に (實悟本)	247	かたみには	これをやいはん つくりし	藏人が	いのちはさらに	自在ならねば
一、一、	○ 下間上野蓮秀菊壽さい ひし時灯臺もごに侍 るを聞召て(實悟本)	248	よるごに	柱にそふる	影みれば	たれもそへこや	菊壽なるらん
一、二、	○ (實悟本)十首	249	千代やへん	松花 _イ ふる _イ	大坂の	ひかりはなをも	生玉のみや
一、一、	○	250	いくたまの	神のめぐみの	志宜の森	よそやこしの	し大さか
一、一、	○	251	いくたまの	神も久しき	このごころ	よみよかりけり	しぎの大さか
一、五、	○	252	このたびは	不思議に命 違例	なりなをし _イ	又きてみつる	堺なるらん
一、一、	○	253	いくたまの	ひかりかやく	しぎのもり	みちもひろげに	みゆる大さか
一、一、	○	254	老らくの	命のかすまず そのふる _イ	生玉の	ひかりにあへる	春の大さか
一、二、	○ 正本	255	みな人に	彌陀をたのめ	夕浪の	河をたてゝ	みゆる大さか
一、一、	○	256	又舟に	のりてごをる	わたなべの	磯きはごをる	大さかの山
一、二、	○ 正本	257	大さかへ	のほらんごおもふ	みちよりも	彌陀をたのめる まん _イ	心あるべし
一、一、	○ 正本	258	みな月の	昔ながらの	はらひして	いく玉まつる	けふの大阪
一、一、	○ 三月三日佳吉の濱にて (實悟本)	259	住吉の	ちかひかはらぬ	海なれば	ひくしはみづの	ほごのこぼさよ

○前歌に一句違也可略歟
(實悟)正本

○(實悟本)十二首

○

○ 正本

○ 正本

○

○ 正本

○ 正本

○ 正本

○ 返し 如宗禪尼 正本

○

○

○

○ (實悟本) 一 (實如本)

○ (實悟本) 二首

蓮如上人和歌集

260 春たつこ

いふよりはやく 三吉野

やまもかすみて

けさはみゆらむ

261 日にそへて

さきでまされる にはの梅

匂にふかき

あさほらけかな

262 わかなみも

こしをつむにも 此春の

春のはじめの

さかひなりけり

263 ながむれば

くもるこもなき 春の世の

月にかすみて

かへる鴈がね

264 春の日の

くもるけしきは ときなれや

かすむはけふの

花のゆぶくれ

265 櫻花

さかぬさきより にはふらん

木の本くらく

かすむ夕暮

266 日々に猶

みぎりこそふる 春木立

色こそまされ

庭のふし松

267 郭公

なくこは人の つけしかさ

けふぞはじめて

聞や初音を

268 あさほらけ

雲井のほかの 郭公

なく一こゑの

こをくきこゆる

269 よるながら

あけゆく空の 郭公

雲のいづくに

なきてすぐらん

270 わがねがひ

人のおもひも みつしほの

ひかれてうかむ

波の下草

271 ふりにけり

軒端のよそに をこありて

苦よりおつる

玉あられかな

272 山しなを

朝たつ空の 道すがら

のりてやわたれ

まつ時雨らん

273 秋すぎて

冬きにけりな 神無月

老のなみだや

き

274 雪ふれば

春もちかけに みよし野の

花のおもかけ

思いでけり

(の服カ)

索引

あかつきの	六	いくたびか	四三	なゝそちあまり	八六	ながいがみの	三三
あきさりて	元	いくたまの	一五	なみだつゆけき	一八	ながいがみは	一八
あきすきて	三三	かみのめぐみの	三〇	いづみなる	六九	いのちいままで	六七
あけくれは	四	かみもひさしき	二五	したてのいけを	五五	なゝそちあまり	八三
あさぼらけ	三六	ひかりかゝやく	二四	ふけぬのうらの	三三	のちまでたのむ	三三
あすはげに	三三	いくはるの	二六	いづるいき	一七	むかしがたりを	一五
あすもさば	三〇	いちねんに	一七	いでそむる	二〇	をいらくの	一八
あつきひに	元	あみだをふかく	三三	いばさかや	三	いつまでかくは	二五
あつらへし	一五	はやわうじやうを	二二	いまははや	二六	いのちそのぶる	二五
あはれなり	二七	むまれゆくべき	二〇	ごしやうのくも	三	いのちのかすます	二五
くれゆくさしの	四三	いちねんの	二四	やそちにちかき	二六	おきれにつけて	一七
ないのやまひの	三三	いつそちに	二	う	三	たちぬにつきての	二四
あまびさの	四三	いつまでか	三三	うへをける	三	さしをかさぬる	二六
あみだぶと	二五	うねのいのちの	二四	うまれつく	二六	はるあきなくる	二六
まうすみなこそ	二九	なゝそちなゝつ	二〇	うれしやな	八七	おくよしの	四
なりしほさけの	一六	わがみながらも	二〇	え	二〇	なくるさし	二三
あらたまの		いつまでさ	五五	えにしあれば	二〇	おつるはも	三五
		おくるつきひの		お、そ		おさにきく	

しみづのうらに ますだのいけを おなじくば なのやまや おほやけつゞく ふもさばやましな おほさかへ おぼつかな おやのさしそ	か	かゝるみな かきをきし ねぶちのかうの ふでのあさこそ ふみのことばに かきなくも かきさむる かぎりなく かしまやま かぞふれば かたみには これをやいばん ろくじのみなを
二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇	二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇	

かはなべの きけやひさ きのふまで く くさきさへ、まで くるばるも け けふはばや あくるくもぬの ひもうすがすむ けふまでは けふよりは こ こくらくに こくらくへ こくらくは こじふこの こじふろくは このことば このころは きやうやほんじよな やそぢにあまる	二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
--	---

このしまに このたびは このはちる このはるは これほごに さ さかこえて さきつゞく さくらばな し しのあさを しほせつき じゆざうさば しんじつの す すみよしの そ そふのさしそ た たかきやま たぐひなき たゞたのめ たてなきし	二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
---	---

たにたにの たのませて たのめたゞ たのめさの たらちなを たれさても ち ぢいのさしそ ちよやへん つ つくづくさ つのくにに つのくにの さかひよりみる むかしながらも つみのみな つみふかき ひさをたすくる みさむまれぬる つみふかく つゆのみの つれなくも なくそちなつ	二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
---	---

やそぢにあまる	一四	われをこひし	二四	のちのさし	二六	ひにそへて	二六
つれなやな	一五	われをたづぬる	三	のちのよに	二七	ひになほ	二六
と		われをわすれぬ	三	わがなをおもひ	二七	ふ	二六
さしをへて	六	なつはきのふ	四	のちのよの	二七	ふしぎさも	二三
さしくれて		なゝそぢに		しるしのために	二七	ふしぎなる	二四
をいのいのちも	一五	あまるぞをいの	六	そのかたみこも	二七	ふぢしろの	二二
をいのよはひな	一六	あまるわがみの	七	のりをきく	二七	ふりにけり	二二
さしたくて	一六	あまるわがみも	八	のりのしの	二七	ふるささに	二二
さしつきの		つもるさしまで	三	のりのみち	二七	ふるさしな	二二
つもりしこそは	一五	さしはあまりて	六、二二	は	二五	ふるさしも	二五
つもりつもりて	一七	さしはひさつも	七、九	はちせんも	二五	ほうのきに	二五
さしつもり		なゝつのさしの	九	はつゆきに	二五	ほつぐわんの	二五
いそぢあまりな	一七	はやみつしほの	七	はまさかの	二五	ほさけにも	二五
をやそおなじく	一八	みてるさしまで	七	はるあきを	二五	ほさゝぎす	二五
やそぢにあまる	一八	みはみつしほの	七	はるくれば	二五	ほさほさ	二五
さしのかす	一八	なゝそなゝ	一〇	はるたちて	二五	ほればれ	二五
さつがはの	一八	なにさてか	一〇	はるたつこ	二五	ま	二五
さみさせな	一八	なむさいふ	一五、一五	はるなつは	二五	またふねに	二五
さよよしな	一八	なもしろし	一五	はるのひの	二五	まぬながら	二五
な		にしへゆく	八、一三	ひ	二五	み	二五
ながむれば	一五、一六	の		ひかすへて	二五	みがけた	二五
なきあさに	一五			ひさたびも	二五	みたなた	二五
われをこひしく	一五				二五		二五

こゝろひさつに	一五
たのむこゝろの	一四、一五
みだたのむ	
こゝろひさつの	一六、一五
ひさのこゝろの	一六
ひさはつりする	一六
ひさはれざめの	一六
わがみのこゝろの	一四
わがみばかりは	一六
わがみひさりの	一八
みだのなを	一六
みさせまで	一五
みなつきの	一六
みなひさに	一五
みなひさの	
じゆざうくそ	一三
たすけたまへそ	一五
のりのみちをば	一四
ひしさをたのむ	一五
まこそしのんは	一六
まこそこのりを	一六
みだなたのむ	一六
みだのちかひを	一七

われさをこらぬ	一三
みなひさは	
みだなたのまん	二〇、二二
みだなたのめよ	一六
みやうがうは	二八
みよしのの	九
む	
むそぢあまり	一五
おくりしごしの	一五
たくりむかふる	一五
め	
めいおうさん	一三
も	
もろもろの	一〇
や	
やそぢあまり	
なくりしごしの	一六
なくりむかふる	一五
なくりむかへて	一五
なくるつきひは	一六
こそしもつれなく	一七
はるあきなくる	一六
みだなたのみし	一四

やそぢいつゝ	一八
やそぢには	一五
やそぢまで	
いのちながらふ	二九
をいたしらざる	二五
つもりしごしの	二五
ゆ	
ゆきふれば	二四
ゆのやまを	一六
よ	
よしのがば	一四
よのなかの	一三
よもすがら	一四
よるごに	一八
よぬながら	一六
わ	
わかなを	一六
わがれがひ	一七
わがみたゞ	一四
わがみはや	一四
わきいづる	
いづみのさかひ	二〇
しみづのうらな	一四

われしせば 一八、二四
 われしなげ 一八
 われなくて 二四
 われなくそ 二四
 われなくば 二〇、二九、四〇
 われなしと 二〇

追記 多屋編輯主任の示されたる「佛教文學」第一號（昭和四年六月刊）を検するに、橋川正氏は既に實悟師編の蓮如上人和歌集を紹介せられ又之によりて其著「蓮如上人の和歌」を改版する意圖を有せらるゝ事を知りて今さら自分の迂闊に驚いた。併し橋川氏の仕事の援助もならん歟とも考へて此稿を掲載することにした。